

発表3 WISC その他—現場に必要なアセスメントツール

奥村安寿子(国立精神・神経医療研究センター)・島田かおる(啓明学園)

概要

学校場面で必要な力に焦点を当て、子どもの行動・学習の特性やつまずきを評価するツールとして「教室での活動・遊びを通じた“インフォーマルな”アセスメント」、「教室でできる検査」、「専門機関での検査」の3タイプに分けて紹介した。「教室での活動・遊びを通じた“インフォーマルな”アセスメント」としては、OBCやDLA、音読、視写、しりとり、ためき言葉、絵カードゲームなどがあり、学校場面で見られる行動全般と会話、基礎的な視覚認知や身体運動能力、学習に必要な音韻認識・語彙・読み書き・算数(学習スキル)等を把握できる。アセスメントにあたっては、「読めない・書けない」等の学習の具体的な問題と、考慮すべき言語環境の影響(語彙不足、書字体系の理解不足等)および発達上の問題(知的障害・読み書き障害)を整理し見極めることが肝要である。「教室でも出来る検査」としては、語彙、読み書き、計算などの基礎的な学習スキルを短時間かつ簡便に評価出来る標準化検査としてPVT-R(絵画語い発達検査)¹、ひらがな連続音読検査²、算数障害の症状評価のための課題²、小学生の読み書きスクリーニング検査³、URAWSS II(小学生の読み書きの理解)⁴がある。「③専門機関での検査」として、最も一般的な知能検査であるWISC-IV(ウェクスラー式知能検査:児童用第4版)⁵の内容および数値の意味を紹介し、WISC-IVで評価出来る力と学校活動の関連、さらには多言語環境にある子どもに適用する際の留意点を示した。また、認知能力と習得度を評価するKABC-2⁶、視覚認知や視覚-運動協応の検査^{7,8}も紹介した。アセスメントで分かった特性への対応として検査結果の取り扱い、行動・学習支援の手だて、語彙発達の視点、個別指導から検査への流れを論じた。まとめとして、教室での活動・遊びを通じたアセスメントは、多くの支援者が普段から実施していると思われることから、その視点や方法を体系化・意識化し、他の支援者と共有していくことが望まれる。検査については、簡便かつ客観的に能力を把握するツールとして教室でも出来るものからスタートし、子どもの困難の本質をつかむ必要が生じたときには専門機関での受検を検討するべきである。

【紹介した検査】

- 1 上野一彦・名越斉子・小貫悟(2008).『PVT-R 絵画語い発達検査』. 日本科学文化社.
- 2 稲垣真澄(編集代表)(2010).『特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン-わかりやすい診断手順と支援の実際-』. 診断と治療社.
- 3 宇野彰・春原則子・金子真人・Wydell, T. N. (2006).『小学生の読み書きスクリーニング検査(STRAW)-発達性読み書き障害(発達性 dyslexia) 検出のために-』. インテルナ出版.
- 4 河野俊寛・平林ルミ・中邑賢龍(2017).『小学生の読み書きの理解(URAWSS II)』. atacLab.
- 5 日本版 WISC-IV 刊行委員会(2011).『日本版 WISC-IV 知能検査』. 日本文化科学社.
- 6 日本版 KABC-II 制作委員会(2013).『KABC-II 心理・教育アセスメントバッテリー』. 丸善出版.
- 7 飯鉢和子・鈴木陽子・茂木茂八(1977).『日本版フロスティグ視知覚発達検査』. 日本文化科学社.
- 8 Hammill, D.D., Pearson, N.A., & Voress, J.K. (2014). *Developmental test of visual perception 3rd edition (DTVP-3)*, Pro-ed.

ディスカッションの内容のまとめ

フォーラムで紹介したアセスメントツールについての質疑応答を通じて、多言語環境にある子どもの特性・困難を評価する際の問題点を議論した。前半は WISC に関する質問が中心であり、言語理解に関する検査の実施方法(答:検査者が口頭で問題を読み上げる)、問題内容や検

査方法の変更（答：基本的に不可、変更した場合はその旨を明記した上で参考値扱いとする）、通訳を介しての実施（答：不可能ではないが慎重な解釈が必要）、実施の最低条件（答：各検査の教示が理解でき、問題にある程度正答出来る見込みがあること）、非言語的な検査結果に基づく判定の是非（答：全般的な知的発達水準の判定はするべきでない）などが挙げられた。それらから、言語レベル等の問題で妥当な結果が得られないと予測される場合は WISC を実施しないのも一つの判断であること、検査によって有益あるいは必要な情報が得られるか否かを実施以前に十分吟味すること、実施にあたっては多言語の影響も加味した解釈が出来る検査者／支援者が不可欠なこと等が結論として出された。また検査の前段階において、子どもの情報が保護者、個別指導の担当教員、クラス担任、学年・学校、専門／相談機関の各レベルで十分に収集・共有されていることの重要性も指摘された。

フォーラムで紹介したようなアセスメントがどこで受けられるかという問いも多く寄せられ、市町村の発達相談、医療機関（小児科、小児神経科）、発達クリニック等が挙げられたが、いずれも非常に待ち時間／期間が長いことを参加者の多くが認識していた。受検を待つ間に支援が遅れるケースも多いと考えられることから、検査によらないアセスメントを活用して少しでも早く有効な手だてを講じていくことが望まれる。

後半は、日本語の能力測定のための DLA 及び OBC 語彙検査に関するディスカッションとなった。公立学校の教員でない参加者が多かったためか、実際に DLA/OBC などで日本語能力を評価した経験があるという回答は少なかった。公立学校には DLA が配布されているが、実施されていないケースも多いようであった。発達のアセスメントを進めると同時に、OBC 語彙検査などで子どもの日本語／母語語彙力を適切に評価していくことも今後の課題と考えられた。

全体のまとめとしてどんな検査であっても、1) ある特定の力を、2) 一定の条件の元で、3) あらかじめ設定された基準と比較して測るもの、という性質を理解する必要がある。そして、検査の目的は数値を出すことではなく、子どもの特性や現状を把握し、どのような支援を行うかを方向付けることであり、そのような視点の元で紹介したアセスメントツールが活用されていくことが望まれる。

【参考文献】

- ・村井敏宏、他（2010、2011）. 読み書きが苦手な子どもへの基礎トレーニングワーク・つまずき支援ワーク・漢字支援ワーク 1~3 年編・漢字支援ワーク 4~6 年編. 明治図書出版.
- ・上野一彦・宮本信也・柘植雅義（2012）. 特別支援教育の理論と実践 [第 2 版] I 概論・アセスメント、竹田契一・上野一彦・花隈暁（編）、金剛出版.
- ・上野一彦・松田修・小林玄・木下智子（2015）. 日本版 WISC-IV による発達障害のアセスメント -代表的な指標パターンの解釈と事例紹介、日本文化科学社.
- ・フラナガン、D. P. &カウフマン、A. S.（著）、上野一彦（監訳）（2014）. エッセンシャルズ WISC-IV による心理アセスメント、日本科学文化社.
- ・プリフィテラ、A.、サクロフスキー、D. H.、&ワイス、L. W.（編）、上野一彦（監訳）、上野一彦・バーンズ亀山静子（訳）（2012）. WISC-IV の臨床的利用と解釈、日本科学文化社.
- ・藤田和弘・石隈利紀・青山真二・服部環・熊谷恵子・小野純平（監修）（2014）. エッセンシャルズ KABC-II による心理アセスメントの要点、丸善出版.

以上